

「体のともし火は目」

2015年08月12日

ルカによる福音書 11章 33節～36節。「ともし火をともして、それを穴蔵の中や、升の下に置く者はいない。入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く。あなたの体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい、濁ってれば、体も暗い。だから、あなたの中にある光が消えていないか調べなさい。あなたの全身が明るく、少しも暗いところがなければ、ちょうど、ともし火がその輝きであなたを照らすときのように、全身は輝いている。」

主イエスは「ともし火をともして、それを穴蔵の中や、升の下に置く者はいない。入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く」と言われる。マタイ福音書 5章 15節、16節bの並行記事で「また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい」と書いている。ともし火は暗さを明るく照らすために燭台の上に置き、穴蔵や升の下に置くことはない。

そして「あなたの体のともし火は目である」と、目が周りを照らすともし火である。目が澄んでいれば、全身が明るくなるが、濁ってれば、体は暗くなる。目の明かりによって、体が明るくもなり、暗くもなると言われる。だから、体のともし火である目の光が消えていないかを調べなさい。少しも暗いところがなく、明るければ、ともし火の輝きが照らすように全身が輝いていると言われる。この言葉には戸惑いを覚える。体のともし火である私たちの目が澄んでいれば、全身が明るく輝くと言われるが、現実下記のようなであろう。周りの状況によって、私たちは明るくも暗くも思わせられる。そして、自分自身とこの世を見る時、破れている現実を知らされ、暗い思いに引き込まれ、全身が明るく輝くようなことは少ないというのが事実である。悲観論者でなくとも、誰もがそのように認識していよう。人は皆、他人のことは目に入らず、自分と仲間内のことしか考えられない。そこでは、敵対心と争いが絶えず、目をそむけたくくなるような世界が広がっている。これらの現実を見て、全身が輝くような喜びは体験できない。

新共同訳は「澄んでいれば」「濁ってれば」と訳しているが、岩波訳は「純真な」「よこしまな」と直訳している。目が純真であるか、よこしまであるかの対比で捉えている。この訳から、新たな視点が与えられる。純真な目とは、この世がどんなに破れていようとも、主イエスが「神の国」の宣教で現された神による「肯定」を見る、主イエスをひたむきに見る目である。神に肯定されている現実を受容する時、その目に入る全ては「良いもの」として認識できる。その時、全身は明るく輝く体として喜べる。よこしまな目、人間の価値観に左右される目で見ると、神の肯定は見えず、ただ罪の痛ましい事実しか見えない。その時、体は暗黒の中に沈み込む。

神は、6日間の天地創造において全てを「良しとされた」。主イエスは十字架と復活において全ての人を「罪なし」と肯定された。この信仰に立つことが「よこしまでない」「純真な」目を持つことであり、その者は悲観的、否定的な思いに捕われず、楽観的、肯定的に受け止め、輝く者となる。体のともし火である目が神の肯定の光を受けていれば、純真な目でものを見、私たちの生とこの世は輝いて見えてくる。主イエスの十字架と復活によって罪と死は滅ぼされ、全てに勝利している。この勝利に与って、体全身で輝いて生きよと語られたのである。